

企画・制作 埼玉新聞社県北支社

鈴木厚志さん

立正大学地球環境科学部 学部長・教授

専門は地理情報科学、地図学。
デジタル地図の仕組みや活用などの可能性を研究している。
日本地図学会常任委員長、(公社)日本地理学会理事などを歴任。
現在は、(一財)地図情報センター理事、
熊谷市緑化推進審議会会長などを務める。



「コト」のはじまり対談

始点の視点

立正大学 熊谷キャンパス発

第2回

設楽竜也さん

株式会社シタラ興産 代表取締役

2016年、AI搭載ロボットを導入して話題に。
第7回渡辺栄一ビジネス大賞「ベンチャースピリット部門特別賞」ほか
受賞歴多数。全国産業資源循環協会青年部協議会関東ブロック長、
著書に「旗を立てずに死ぬるか」(プレジデント社)。



「環境研究の原点」地域を知る

地域の魅力 地図で読み解く

鈴木 白黒の旗ざおは鉄道、丸に「文」の一字は小・中学校、といったように地図は記号の世界です。広い範囲を表現するほど、地図は記号化されますが、その意味は誰もが読み解けます。これが、地図の面白さの一つです。

映画『のぼうの城』に、家臣が忍城周辺の絵地図を前にして戦略を練る場面があります。古くから、時の権力者や知識人は地図を大切にしました。鳥のように広い範囲を一望する術が地図だからです。思えば、現代を生きる私たちにとっても同じです。

今、私たちのいる地図資料室には、古い地図や空中写真がたくさんあります。それらを並べて見比べると、土地利用の変化や、まちの発展の様子が見えてきます。例えば、全国に知られる深谷ねぎの生産がいつ頃始まり、ねぎ畑がどう広がったのかなどが分かります。さらに踏み込んで言えば、文化の醸成や暮らしの成り立ちなどまでを読み解けます。地図は、地域の魅力や特性を知る上で重要で、貴重な資料です。

設楽 会社は深谷にあります。2025年の完成を目指して、新工場の計画を進めています。実は、新工場の建設に向けては、地図

と深いかわりがあることに気がきました。特に、環境影響評価調査を進める中で、地形や地質、河川や地下水の状態、地域に生息する動植物の状況など、地図から多くのことを学び、私が生まれ育って事業を続けている地域を見直す機会になりました。

新工場は産業廃棄物の焼却発電施設で、単炉の発電量としては県内最大規模を目指しています。発電した電力の余剰分はすべて、地域の電力会社「ふかやパワー」へ売電する計画で、電気の地産地消を実現したいと思っています。

電気に名前は書けません、地域の皆さんには、地元企業が作った「ご当地産電気」であること、廃棄物をサーマルリサイクルした電気であることなどを知って使っていただけたらうれしいです。きっと、まちづくりにつながると思います。

それが、私たちが地域に溶け込むことで、しょうし、産廃業界全体を変えていく手がかりにもなると考えています。

まちづくり 広い視野で見る

鈴木 地域を見直す、まちづくりにつなげるという視点が提案されました。では、地図に何ができるでしょう。

まちづくりを考えるとき、地域だけを近視眼

的に見がちですが、まずは広い範囲から見る、俯瞰(ふかん)することが最初の一步だと思います。ただ、その視点や見方を身に付けるには、勉強も必要です。

埼玉県北部は都心から50〜60キロ。古い地図から時間を追って見ていくと「調和したまちの姿」が見えてきます。鉄道や道路網の整備を背景に、農業や製造業などの産業、住環境、自然などが調和しながら発展しているのが大きな魅力です。

さらに、それぞれの地域には、歴史や文化などの独自の魅力があって、今も大切に守られて残っています。地図は、そうした暮らしのありようも私たちに教えてくれます。それらに敬意を払い、まちづくりに生かすことが大切です。

設楽 「ご当地産電気」は、ご指摘の暮らしのありようを変えるきっかけになるかもしれません。新工場は大容量の蓄電能力を備え、災害時には地域へ電力を供給して地域の安心を支えます。

この20年間で、産廃業界を見る社会の目は大きく変わったと感じます。この変化をさら



地図は、地域を知る重要な手がかり。時代を追って見比べると、暮らしのありようも見えてくる。地図資料室で

に加速しなければなりません。今、業界では事業継承が進んでいます。舵取りを引き継いだ私の世代には、地域の中で企業の役割をさらにしっかり果たすことが求められていると感じます。

鈴木 環境問題が世界的に注目される中で、地球環境科学部は1998年に開設されました。そして今、国連は持続可能な開発目標(SDGs)を提唱しています。深谷出身の渋沢栄一は『論語と算盤(そろばん)』の中で経営者の道徳心や公益の大切さを説いていて、SDGsにつながる考え方と感じます。

産学連携 学生と話す場から

設楽 これからの時代、面白い発想や奇抜な着想が必要だと感じています。例えば廃棄物処理に「消滅」という方法が生まれるかもしれない。地球環境科学部で学ぶ学生の皆さんと話す場があったら、私たちに大きな刺激になると思います。

鈴木 熊谷キャンパスは、地球環境科学部の研究対象地域です。地域を知ることが環境研究や教育の原点だからです。そうした意味で、高い透明性や地域貢献の最前線に立つ企業の話聞くことは、学生にとって大変有意義でしょう。ぜひ、機会をみつけて実現したいものです。

AIロボット導入。廃棄物を自動選別 産廃処理施設で国内初 シタラ興産

2016年、屋内型混合廃棄物選別施設「サンライズ FUKAYA」が完成。AI(人工知能)を搭載したロボットを導入して、排出現場で分別しきれない「混合廃棄物」を自動選別し、リサイクルなどの適正処理へ道を開いた。ロボットはフィンランド製で、国内の導入は同社が初。全国から視察が後を絶たない。



AIロボットが、廃棄物を識別して所定の場所へ選り分ける(写真:シタラ興産)

